答辞

キャンパスの桜も咲き始め、春の訪れを感じさせる季節となりました。本日は、ご来賓並びに教職員の方々をはじめ、皆様のご臨席を賜り、このように盛大に学位授与式を開催していただきましたこと、卒業生を代表しまして、深く御礼申し上げます。

振り返ってみますと私達の大学生活はパンデミックにより、先行きが見えない中で始まりました。閑散としたキャンパスを歩き、授業もオンラインが多かったことから白衣・安全メガネ・手袋・マスクをつければ誰か全くわからないといったこともありました。しかし、先生・職員の方々のご尽力により、制限がある中でも、最大限 学生実験を行えることができたほか、オンラインならではの双方向的な講義を通じて化学の奥深さに触れることができました。その結果、私達は絶えず化学への興味を深め、今日を迎えることができました。

研究室配属後は、今までのいわゆる「勉強」とは異なり、誰もわからないことについて、自ら文献を調べ、実験するという試行錯誤のサイクルを、日常やゼミにおいて先生方・研究室のメンバーとのディスカッションしながら、学ぶことができました。研究室で培った研究への姿勢や手法は、来月からの進学・就職先で活躍するための大きな糧となると確信しております。

社会的にも、この四年間で大きな変化がありました、人口知能です。ご存知の方も多いと思いますが、chatGPT をはじめとした AI の発展は目覚ましく、化学においてはマテリアルズ・インフォマティックスや実験のオートメーションなど新領域が発展しています。同時に、私たちがこの時代に化学を学ぶ意義や手法を改めて考え直す機会となっています。作家の星新一さんは著書に「機械がいくら人間に迫ろうが、それはいい。人間が機械のごとくなる傾向の方が問題である。」と記していました。現状はいかがでしょうか？　世界が急速に変化し、複雑化する中、技術と共に私たちの創造性をさらに高めることが、今後一層重要になると考えられます。応用化学科で学んだ幅広い分野の知識と研究の経験を基礎に、私は今後も既存の枠組みにとらわれずに学び続け、化学というツールを武器に「役立つ化学・役立てる化学」を国際的に実践していく所存です。

結びになりますが、化学の面白さ・奥深さを熱心にご指導・ご鞭撻を賜りました先生方、職員の方々、大学院生の方々に心より御礼申し上げます。さらに、大学生活をより実りのあるものにしてくださった、同期の方々、そして何より家族にこの場を借りて感謝申し上げます。

皆様のご健勝・ご活躍、並びに応用化学科のさらなる発展を祈念しまして、答辞とさせていただきます。

二〇二五年三月二六日

早稲田大学　先進理工学部　応用化学科
卒業生代表　小安